

カブトムシの飼育を通して 呉市奥内保育所（広島県呉市）

トンボ博士とトンボの産卵を見たり、カエルを捕まえて観察したり、磯遊びに行き行って捕まえた海辺の貝・カニなどで遊んで、もとの場所にかえしてあげるなど、命を大切にしながら生き物と関わる体験をしてきた。しかし、カエルも磯の生き物も短期間の飼育だったので、生命の誕生、死に継続して関わる機会はなかった。そこで今年度はカブトムシの幼虫を飼うことにした。

1、カブトムシの誕生と死(7月上旬～中旬)

保育所で飼っていたカブトムシが7月初旬から次々に成虫になった。毎朝観察ケースの前にたくさんの子どもたちが集まってきて、カブトムシが餌を食べる様子を見たり、成虫の数を数えたりして増えるのを楽しみにした。7月19日の朝、雌が1匹頭部を切断され死んでいた。

A児:「あっ、死んだよ」

B児:(思わず、もう一つの観察ケースを開けて、生きているのを確認して)

「わー、こっちは生きとるよ。よかった！」

死んだカブトムシを土に埋めて、「天国に行つてね」とお祈りする。



<大好きなゼリーを入れてのお墓作り>

<考察>カブトムシが頭部を切断され死んでいるのを発見したA児はすごく驚いていた。それにも増してB児が他の観察ケースの中に生きている別のカブトムシを確認したときの喜びようは大きかった。普段おとなしいB児が声をうわづらせて本当に嬉しそうだった。人の「死」に接する機会が少なくなっている現代、身近な生き物を飼育して「死」に接することは大変重要な意味をもつと思った。

2、カブトムシのつめは痛いよ(7月下旬)

カブトムシを観察ケースから出して触ったり、木に登る様子を見たりして遊ぶ。触るのを恐がっている子もいる。友達が触るのを見て勇気を出し、掴む(嬉しそう)。遊んだ後、カブトムシになったり、絵を描いたりした。<考察>どの子どもたちも、カブトムシを実際にさわって遊ぶと大喜びだった。柔らかな感受性をもつ3歳未満児は、保育士と一緒にカブトムシになりきって遊んだ。3歳児が描いた絵には、カブトムシの足のギザギザがしっかり描かれていた。カブトムシに触ったときに「チクッ」と痛かった思いが表現されていた。生き物を実際に触る体験がその後の表現活動に及ぼす影響が大きいことを実感した。



カブトムシの動きをじっと見守っている3歳未満児



カブトムシになって遊んでいるところ



(表現活動) 遊んだ体験が、カブトムシのツメの表現につながった作品



3、カブトムシさんさようなら(8月中旬)

夏が終わりに近づくとカブトムシがだんだん死んでいった。不思議に思った子どもたちは、絵本「かぶとむしはどこ？」(著者:松岡 達英 出版:福音館書店 定価880円)を見て、カブトムシは成虫になって1つの夏しか生きられないことを知った。

7月下旬から「伸ちゃんのさんりんしゃ」(原作者:児玉辰春 出版:童心社 定価1,365円)「さだ子と千羽づる」(著者:SHANTI フェリス女学院大学学生有志 出版:オーロラ自由アトリエ 定価1,000円)等の戦争をテーマにした絵本を読んだり、映写「つるにのって」を見たりして「命」の大切さを感じていた子どもたちなので、大好きなカブトムシが死んだことはとても悲しかったようだ。

保育者:「カブトムシさん、また死んでしまったね。どうしようか？」

子どもたち:「お墓をつくってあげよう」

保育者:「絵本には、『8がつのあるひ・そらをとびっ…』て、書いてあるけど…」

「保育所のカブトムシさんは生まれて空を飛んだことがあったかなあ？」



戦争によって落とされた原子爆弾で病気になるも懸命に生きるさだ子さんの姿が描かれ、子どもたちが感動した絵本

子どもたち：「飛んどらん」
 保育者：「このまま観察ケースに置いておく？」
 子どもたち：「逃がしてやるうや」
 （1ヶ月余り一緒に過ごしたカブトムシ
 を保育所の木に逃がした。）



<考察>子どもたちは、毎日ケースをのぞきこんだり、手のひらに乗せて遊んだりするうちに、カブトムシが少しずつ元気がなくなっていることに気付いていた。しかし、絵本「かぶとむしはどこ？」を読むまではカブトムシを逃がすことは考えていなかったようだ。ところが、絵本「かぶとむしはどこ？」を読むことでカブトムシの一生を知り、今生きているカブトムシもやがて死んでいく運命であることを予想し、自分たちの意志でカブトムシを逃がすことに決めたのだと思う。

カブトムシの誕生、生活、産卵、死・・・の命のつながりについて知るきっかけになった絵本

4、新しい命の誕生(9月初旬から中旬)

今までカブトムシがいた観察ケースを見ると丸い白い玉と幼虫がいた。

絵本で調べるとカブトムシの幼虫だと知る。

保育者：「この幼虫がカブトムシさんになっている頃、みんなは何組さんになっているかな？」

子どもたち：「1年生」「あおぐみ」「ももぐみ」

1年後のクラス名を元気よく答えた。腐葉土を交換するときも、幼虫をそっと新しい腐葉土に乗せてあげる優しさも育ってきた。



カブトムシが死んだ後、生まれた卵が幼虫になったのを確かめている子どもたち



卵がやがて幼虫になっていくこと、幼虫は腐葉土を食べて大きくなることを確かめた絵本

書名「かぶとむしは どこ？」 P28

<考察>目の前のカブトムシの幼虫が1年後、自分たちが大きくなった時、また成虫になることも予想することができた。絵本が果たす役割は大きいと思った。幼虫を大切に育て、子どもたちの「来年成虫に会いたい」という希望をかなえてあげたい。

みどころ

飼育栽培物とのかかわりによって生き物の特徴や命を感じ、育てることの大切さや喜びを味わうことができます。そしてその命が消えそうな変化や死に気づき、その場面でしか感じることでできない感情を体験します。子どもらしい感性・感受性を発揮して目の前の生き物の状況を感じ取り、自分なりにその「死」を受け止め、自らできることをしようしたり今までのことを振り返ったりします。

また、こうした命との出会いや別れを大切にすることで、生き物への思いが深まっていることが、かかわり方にも表れるようになります。